



前回、2024年度上期目途に予定されている日銀券（お札）の改刷を話題としたが、今回は新券の顔となる3人について。日銀水戸事務所長としては、3人と茨城県との関わりを知りたくなり、調べてみた。とりとめもないトリビアとなってしまうことをお許しいただきたい。

新1万円札の顔となる渋沢栄一は、水戸学に影響を受け、また、水戸藩第9代藩主徳川斉昭の子・慶喜（最後の将軍）に仕えた。76歳の時に

日銀水戸事務所長 上野 淳

は講演のために弘道館などを訪れ、水戸への特別な思いを語っている。これらについては、2年前の大河ドラマや、弘道館で行われていた企画展などでご存じの方も多いだろう。

新しいお札の顔と本県

次に、新千円札の顔となる北里柴三郎。世界で初めて破傷風菌の純粹培養に成功し、破傷風血清療法を確立した北里については、①本県八千代町出身の医学博士、高野六郎（北里研究所の第3代所長）の師であること、②水戸市出

身の横綱・常陸山を大変ひいきにしていたことなどが分かった。高野が執筆した伝記によると、北里は常陸山の洋行をあっせんするとともに、その旅費も世話をしたと伝えられて

山（既に引退）とその付き人が来賓客を出迎えたとのことである（上山明博による伝記）。なお、北里の妻の父松尾臣善は、第6代日銀総裁だ。

最後に、新5千円札の顔となる津田梅子については、残念ながら本県との関わりは確認できなかった。ただ、6歳の時に岩倉使節団に随行した最初の女子留学生5人のうちの一人として渡米し、17歳で帰国、ほぼ忘れてしまった日本語などに苦勞しながら、近代的な女子高等教育の発展に尽力した生涯は大変興味深い。

津田が創立した女子英学塾（現・津田塾大学）の経営に参画した吉川利一が津田本人にも校閲を受けつつ執筆した伝記や、津田が長年にわたって留学時代のホストファミリーに送り続けた手紙をふんだんに織り込みつつ大庭みな子が著した伝記などを読むと、教育の場での生徒への熱意と厳しさ、招かれて住み込んでの伊藤博文家との交流、結婚に対する考え方などが生き生きと伝わってくる。なお、津田も、ルーズベルト大統領に謁見している。それも、何と常陸山のたった2日前に！

（今回は5月13日掲載）